令和６年度　大学院看護学研究科

入学者選抜（第１期）模範解答例

I.　【慢性看護学分野】

解答例

結果予期：ある行動によって、特定の報酬や結果が得られるという予測のこと。例として、勉強をすれば（行動）、成績が上がる（結果）や、この練習をすれば（行動）、試合に勝つことができる（結果）」などである。例として慢性期にある人が、食事療法について何度もつまづきながらも家族と話し合い、学習し、工夫を重ねることでうまくできるのではないかと予測すること。効力予期：その行動を、自分ならうまく遂行できるという自分自身への確信である。結果を出すためには、結果予期だけではなく、行動を起こせる効力予期が重要であると言われている。

II.　【地域看護学分野】

解答例

ヤングケアラーが直面している問題について以下の観点から記述されることが望ましい。

核家族化や共働き世帯の増加、地域コミュニティの希薄化を背景に、ヤングケアラーの存在は家庭内の問題であり、周囲が気づきにくい、加えて支援が入りにくい潜在化している。

- 教育機会の喪失や学力の低下
  - ・介護や家事により睡眠不足や学習時間の確保ができずに、授業中の居眠りや遅刻・欠席が常態化する。
  - ・進路の断念や不登校、将来の非正規雇用といった貧困の連鎖のリスクを招く。
- 心身の健康への影響
  - ・肉体的負荷や、子どもらしい情緒的発達の阻害、燃え尽き症候群や孤立感
- 対人関係と社会性の形成不全
  - ・友人との交流や部活に参加できず、同年代との共通の話題が持てなくなる。同世代との心理的距離感が生じ、対人スキルを養う機会を失う。

自身の考え（看護職）として以下の点が記述されていることが望ましい。

・ヤングケアラーの問題解決には早期発見（入院時や外来、訪問看護の場面においてのケアの担い手）例中高生の子どもが立ち会う、子どもの付き添いでの受診など

・子ども自身が「ケアラー」であることを自覚していないことも多いことから、教育現場や医療機関が気づくためのネットワーク構築が重要

・適切な社会資源や公的なサービスの拡充

III.【母性看護・助産学分野】

解答例

1. テーマ：母体優先の原則と胎児の生命尊重の間での意思決定支援

【起】母性看護における倫理的対立の定義

母性看護の現場において、母体と胎児は「一心同体」でありながら、医療的・倫理的には「二つの生命」として尊重される。しかし、重症妊娠高血圧症候群や前置胎盤による大出血、あるいは合併症の悪化など、妊娠の継続が母体の生命を著しく脅かす事態が発生した際、母体の生命維持と胎児の生命保護が鋭く対立することがある。このような局面では、母体救命のために妊娠を中断するか、胎児の生存可能性（生存生存限界）を信じてリスクを冒すかという、極めて過酷な倫理的選択が迫られる。

【承】現代社会における課題：高度医療と価値観の多様化

現代の周産期医療は、新生児医療（NICU）の進歩により、かつては生存が困難だった週数での出生も可能となった。しかし、この進歩が逆に「どこまでリスクを負うべきか」という葛藤を複雑にしている。さらに、晩婚化に伴う高年齢出産の増加や、不妊治療を経てようやく授かった子どもであるという背景など、家族側の「子どもを諦められない」という強い願いが、医学的な勧告（母体保護）と衝突するケースも少なくない。母親自身が自分の命を削ってでも子を助けたいと願う「自己犠牲」の心理と、医学的な「母体優先」の原則との乖離が、現代における深刻な課題となっている。

【転】母性看護学の視点による倫理的調整

このような倫理的ジレンマに対し、看護職に求められるのは、単なる情報の伝達ではなく「意思決定支援」と「倫理的調整」である。まず、医師から提示される医学的状況を家族が正しく理解できるよう補完し、母親が抱く罪悪感や葛藤を無条件に受容することが不可欠である。看護職は「母体保護法」という法的な枠組みを理解しつつも、目の前の家族がどのような価値観を持って人生を歩んできたのかという「ナラティブ（語り）」を重視しなければならない。医療チーム全体でカンファレンスを重ね、何がその家族にとっての最善（善行）であるかを問い直し、家族が納得して選択できるような心理的土壌を整えることが看護の本質である。

【結】結論と今後の展望

母体と胎児の生命の対立は、正解のない問いであり、どのような結論に至っても家族に深い心の傷を残す可能性がある。しかし、看護職がその苦悩を共有し、倫理的感受性を持って寄り添い続けることで、家族はその選択を自分たちの決定として受け入れ、悲嘆（グリーフ）を乗り越える一歩を踏み出すことができる。私は将来、母性看護に携わる者として、生命の尊厳を深く理解し、過酷な選択を迫られる母親とその家族の権利を守り抜く存在でありたい。

2. テーマ：出生前診断に伴う選択と、親の自己決定権の尊重および胎児への倫理的配慮

【起】自己決定権と生存権の対立の定義

現代の周産期医療において、出生前診断の普及は、親に胎児の健康状態を事前に知る機会を提供した。しかし、これは同時に、胎児に疾患や障害が発見された際、その生命を継続するか否かを親が判断するという、極めて重い倫理的課題を突きつけている。ここで生じるのが、女性が自らの人生や家族の形成について自由に決定する「自己決定権（リプロダクティブ・ライツ）」と、一個の

生命として尊重されるべき「胎児の生存権」との鋭い対立である。胎児の生存が親の意思一つで左右される状況において、私たちはどのような倫理的指針を持つべきかが問われている。

【承】現代社会における課題：情報の重圧と社会的支援の不足

現代の課題は、自己決定という言葉が「個人の責任」として重くのしかかり、親が孤立した状態で決断を迫られている点にある。出生前診断により疾患が判明した際、親は将来への不安や経済的負担、社会的な偏見など、多大なストレスの中で判断を下さなければならない。しかし、社会全体の障害者支援や受容体制が不十分なままでは、親の選択は真に「自由な意思」によるものとは言えず、消去法的な中絶（選択的中絶）を誘発する恐れがある。胎児の生存権を考える上で、単なる生命維持の是非だけでなく、その生命を迎え入れる社会環境の未熟さが、倫理的葛藤をより深刻にしている。

【転】母性看護学の視点による意思決定支援の在り方

この倫理的対立に対し、母性看護学の視点からは、結果の良否に関わらず「納得できる意思決定」へのプロセスを支えることが不可欠である。看護職は、特定の価値観を押し付けるのではなく、親が抱く不安や葛藤を無条件に受容し、情報提供の偏りを防ぐ役割を担う。具体的には、疾患に対する正確な医学的知識だけでなく、実際にその疾患と共に生きる家族の生活や、利用可能な社会資源についての情報を提供し、親が「生命」と向き合うための多角的な視点を提示すべきである。また、どのような選択をしてもその後のケアを継続する「非審判的」な姿勢を貫くことで、親の自己決定権を真に守りつつ、胎児の生命に対する倫理的配慮を両立させることができる。

【結】結論と今後の展望

母親の自己決定権と胎児の生存権の対立は、一律の正解が存在しない永遠の課題である。しかし、看護職が倫理的アドボケイト（権利擁護者）として、親の苦悩に寄り添い、多職種と連携して心理社会的支援を尽くすことで、過酷な状況下でも生命の尊厳を重んじた選択が可能となる。私は将来、母性看護に携わる者として、生命の選別という側面だけでなく、すべての生命とその家族が尊重される社会の実現に向け、個別の家族の「語り」に耳を傾け、最善の選択を共に探求し続ける専門職でありたい。

3. テーマ：多胎減数手術をめぐる倫理的葛藤と、納得に基づく意思決定の保障

【起】多胎減数手術の背景と倫理的対立

不妊治療の進展により、多胎妊娠の頻度は以前より高まっている。多胎妊娠は、母体への身体的負担（妊娠高血圧症候群など）や、胎児の低出生体重・早産による予後不良のリスクを増大させる。これに対し、一部の胎児の生存可能性を高めるために、他の胎児の妊娠を中断する「減数手術（減胎手術）」が行われることがある。ここで生じるのが、「一人の胎児の生命」と「もう一人の胎児の生命」の対立である。全ての生命を救おうとすれば全員が危機に瀕し、一部を救おうとすれば一部の生命を奪うことになるという、いわゆる「究極の選択」が迫られるのである。

【承】現代社会における課題：不妊治療後の期待と罪悪感

現代社会における課題は、不妊治療を経てようやく授かった「待望の子ども」に対して、親がこの過酷な選択を迫られるという心理的状況にある。親にとって胎児は、数にかかわらず替えのきかない存在であり、減数を選択することは、生涯消えない罪悪感や喪失感（サバイバー・ギルト）を抱え

るリスクを伴う。また、この手術は法的な整備が不十分であり、医療機関ごとの判断に委ねられている側面があるため、親は情報の偏りや倫理的な孤立の中で、短期間に決断を下さなければならないという状況がある。

【転】母性看護学の視点による意思決定支援とケア

このような倫理的ジレンマに対し、看護職は家族の意思決定を支える「調整者」としての役割を担わなければならない。まず、医学的なリスクとベネフィットを正確に理解できるよう支援し、家族が抱く「どの子も救いたい」という葛藤や、選択に伴う深い悲しみを無条件に受け止める必要がある。看護職は、特定の胎児を選別するという負の側面だけに焦点を当てるのではなく、家族が「家族全体の健康と未来」を守るために下した決断を尊重し、その苦渋の選択を肯定的に支え続ける必要がある。また、手術後も残された胎児への愛着形成を促すと同時に、失われた生命に対するグリーフケアを継続的に行うことが不可欠である。

【結】結論と今後の展望

多胎減数手術は、生命の尊厳を根本から問う問題であり、看護職にとっても正解のない問いである。しかし、親が十分な情報を得て、葛藤の末に「自分たちの選択」として納得できるよう支援を尽くすことが、結果として生まれてくる子どもの健康な育ちと、家族の再生に繋がる。私は将来、母性看護に携わる者として、生命の重さを誰よりも理解し、過酷な状況に置かれた家族の心に深く寄り添い、共に悩み、歩み続ける専門職でありたい